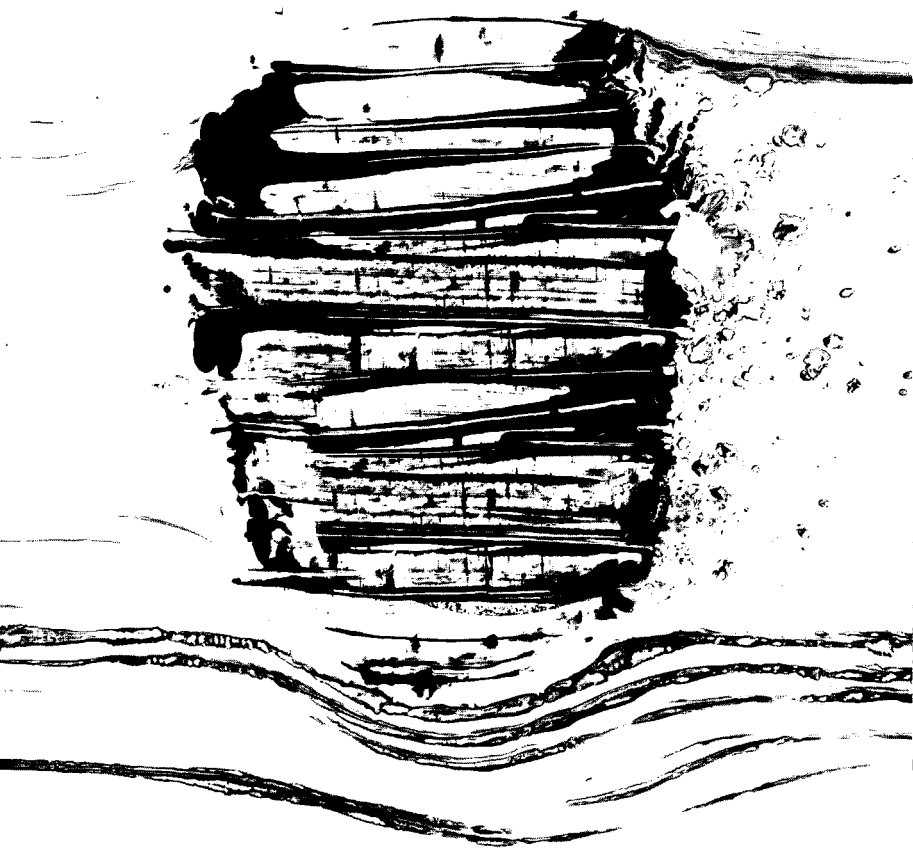


巨人の磯

松本清張



松本清張



新潮社版

巨人の磯

昭和四十八年七月十五日印刷
昭和四十八年七月二十日発行

定価五五〇円

著者 松本清張

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京(280)二二一(大代)振替東京808

印刷 株式会社金羊社

製本 新宿加藤製本所

(落丁本はお取替えいたします)

目次

巨人の礎 5

礼遇の資格 51

内なる線影 95

理外の理 161

東経一三九度線 185

装
画

水
木
連

松本清張作品集

巨人の礎

巨人の礎

仙台で開かれた法医学関係の学会に出た清水泰雄は、帰京の途中、水戸で降りた。九月二十二日の夕方である。

清水は東京の或る大学の教授で、今年の十一月には満六十一歳になる。夏も終った大洗海岸に清水がどうしてひとりで泊る気になったかといえ、九州出身の彼は、未だにそこに行ったことがないからだ。東京に住むようになって長い、いつでもそこに行けると思っていたせいもあって、これまで訪れる機会がなかった。東京で暮していると、遠くからきた客の案内でもしない限り、列車で二時間くらいに近い場所に行くのが、ついさきに延びてしまう。

一度は大洗に行ってみたいという清水の気持には二つの理由があった。一つは例の磯節である。明治の末に生れた彼は、少年時代に聞いた唄といえ、俗歌ばかりだった。流行歌というのが出現したのは二十歳くらいのときで、それまで祝いごとの席で唄われるのや、父の口ずさむのを聞くのが今では民謡とよばれる各地方の俗歌だった。

死んだ父は「磯節」が好きで「磯で名所は大洗さまよ」と下手な節回しでいったが、名人が唄うと嫺々とした旋律の背景に渺茫たる海の荒波が聞えてきそうである。清水は、その唄の舞台を

見たいとかねてから思っていた。

もう一つは、水戸から大洗に行く途中に大串貝塚があつて、縄文時代の貝塚としてよく知られている。清水はそこも見ておきたいと思つていた。考古学は彼の趣味である。医者で考古人類学の専門家になった人はあるけれど、清水はそこまで深入りする気持はなかった。

この大串貝塚のことでは「常陸風土記」に、

「平津の駅家の西一二里に岡あり。名を大櫛おほくしといふ。上古いにしへに人あり。體極かたちめて長大に、身は丘壟うわきの上に居りて、蜃しんを採りて食ひき。その食へる貝、積聚つものりて岡と成りき。時の人大きに朽こちし義ことを取りて、今大櫛の岡といふ。その大人の踐ふみし跡は、長さ三十余歩、広さ二十余歩あり、尿の穴址あしは、二十余歩ばかりあり」とある。

——遠い昔、巨大な男がこの辺の台地上に住んでいて、貝類をとつて食べていたが、その貝殻が積み積つて丘になった。その男の足あとは長さ三十余歩、広さ二十余歩もあり、男が小便して出来た穴は直径二十余歩もある、というのである。

この古い説話は、巨人伝説の形で世界のほうほうにあるそうだが、日本では珍しい。風土記よりにきき出来た古事記・日本書紀の神話にもみえていない。ただし、大きな足跡のほうはタイダラボウの話で各地にあり、げんに清水自身が住んでいる世田谷区代田だいたはその名（大太法師）を取つたといわれている。

大串の岡にいた巨人のことでは、いろいろな臆測が行われ、太平洋の漂流で着いた異人種のこと

とだというのや、アイヌの祖先のクロボックグルだろうという説などがある。吉田東伍の大日本地名辞書にはあとの説が引かれているが、クロボックグルという人種の実在は明治の考古人類学者坪井正五郎が云い出したことで、坪井がモスクワで客死すると、この説は学界から自然消滅した。

そのほか先住巨人説、英雄巨人説、双子山式巨人伝説、背競べ伝説などがあり、柳田国男は山人に対する里人の畏怖感が自然観に混りこんで構成されたものだろうといっている。つまり超自然的なものに対する古代の呪術心理と解している。

清水自身はこうした説にはどうも従いかねるのだが、とにかく、そうした関心もあつて彼はいま大洗に向っている。

水戸に着いたのが午後六時ごろだったので、大串を見るのは明日のことにし、まずタクシーで大洗の旅館に入った。夕食の支度が出来るまで海岸に行つてくることにし、ぶらぶらと海岸通りをその方角に歩いた。大洗磯前神社の大鳥居前を過ぎ町を抜けると磯の匂いが強くなり、すぐに海辺になる。大小の岩礁が手前の海面にひろがっていて、波に囲まれた岩礁の上に小さな鳥居が立っていた。海は屈だが、岩のまわりには白い波が上っていた。

島かげ一つない太平洋の夕暮を望みながら、清水は少年時代の磯節の背景——舞台横で波の擬音をつくる太鼓の音が、いま現実の波の音に現われたのを聞いて、父の唄声や芸人の唄声が耳に蘇よみがえってくるようだった。彼は、沖合に垂れ下る黝あおくろい靄もやが水平線を融けこませてゆくのをしばらくじっと見ていた。

季節外れになつて浜にはよそからきた客の姿はなく、夏場の海水浴客相手の掛け小屋のあとが、うら淋しくならんで残つていた。清水は、此処に來たのは父の思い出や自分の少年の頃の憧憬を拾ひにきたのだと思つた。

引返すとき、大洗磯前神社の松林の丘をコンクリートの大鳥居前から中をのぞくと、社前の高い石段は暗かつた。これも明日の朝にあらためて來ることにした。大鳥居は東南の海に向つていて、はるかに犬吠崎と相對している。

宿に戻つて風呂に入り活魚料理の食事をする、波の音が絶えず遠くから聞えてくる。清水はもう一度海岸に行つてみたくなつた。女中にさういうと、海岸には外燈が少なくお一人では危いから若い衆をつけさせます、といった。芳さんという水戸駅に客を送迎したりする青年が懷中電燈を持って付いてきてくれた。

海岸通りに出ると、なるほど陽が残つていた夕方と、とつぷりと昏れた夜とではずいぶん様子が違つていた。またも大鳥居の前を過ぎてしばらく行くと家の灯も少なくなり、海は真暗がりだつた。たまに疾走して過ぎる車のヘッドライトが道路を稲妻のように光つた。岩の多い砂浜に下りると、芳さんが懷中電燈で足もとを照らしてくれた。黒い岩礁がならぶ海沿いを北に歩いて進んだが、眼は沖合を眺めていた。闇の沖には、ほの白い筋がきれぎれにぼんやりと浮んでいて、白いのは防波堤かと清水はじめ思ったが、夕方見たときはそんなものはなかった、立ちどまつて眼を凝らすと、二つ三つ重なつた白筋は蛇のように出沒しながらやがて一本の長いうねりと連なり、こつちに向つてくる。波音がそれに伴い、岩礁の下に匍はいよると地響を立てて白い

炎を上げた。

幽暗な沖に滲むように浮ぶ白筋の波頭は海に映えた極光かと思われた。鳥居の立つ岩礁の下で、砕ける波がまるで夜の海底から次々と白雲を湧き上らせているようであった。

やはり凄いな、と清水は芳さんにいった。芳さんは見なれているので感動はしないが、この前の台風のときの波は凄かったです、と波の高さを説明してくれた。

しかし、そんな荒れた海面でなくとも、闇に浮ぶ靈光のような真珠色の波がしらを見ていると、冥府から来ているようで、身体を吸い込ませたくなるような誘惑を感じる。自殺する気持の者なら、わけなく波に足を入れるにちがひなかった。

まことに綿津見の暗くも深き冥合の奥所、常世の魂が底なる宮居から波と風の音に乗って言告ぐがごとく、その韻律は巫女の誘いにも似ているようだった。黒暗々とひろがった黄泉の海を、後方の丘の上から巨人の影が死神の如くに見下ろしているようでもあった。

「おい、芳さん」

清水は神秘的な眼が醒めやらぬままに呼んだ。

「その岩の間に巨きな人が波と戯れているよ」

「へっ、ご冗談を」

青年は、といって清水の顔を見た。

「冗談なものか。よく見ろよ。ほれ、あそこだ」

清水が指さすと、芳さんはその方角に懷中電燈の光を当てた。が、遠距離で光は届かず、汐風

にたよりなく揺れた。

芳さんは懷中電燈にたよることを諦め、闇の中に渦巻く白い波の中に眼を凝らした。

「ほら、向うの三角形の大きな岩と、こっちのでこぼこの四角な岩との間だ。波の上に黒く動かないのは頭を見せているだけの岩だが、白い泡の中に揉まれて浮いたり沈んだりする黒いのは人間だよ」

青年もようやくそれを認めたらしい。が、なおもそこに眼を据えたまま疑わしそうにいった。

「あれ、人間ですか？」

「人間でなくて、何だね？」

「人間にしては大きすぎますよ。鯨くじらの子かもしれませんよ。この辺にときどき迷いこんできますから」

「鯨とは大げさだね。もっと懷中電燈が届くところに近づいてみなさい」

芳さんは浜の青年らしく、ズボンをたぐりあげ、水の中に入って行った。岩場を踏み外さないように気をつけながら少しずつ進んだのは、客に命じられたからではなく、若い好奇心からだった。

芳さんは或るところまで行って立ちどまり、懷中電燈をつけた。光は白い波の踊りの一カ所を銀色に照らした。その瞬間に、芳さんの叫びが上った。

「ほんとうだ、化物の土左衛門だア」

芳さんの黒い姿も風と共に海の上に踊った。

「おい、足もとに気をつけろ」

と、清水は青年が揺れながら戻ってくる姿に呼びかけた。

「すごく大きな死体です。とても人間とは思えません。普通の人間の三倍くらいありそうです。丸坊主で、顔なんかゴムマリののように眼も鼻もありません」

清水の傍に戻ってきた青年は昂奮した声で報告した。

「口はあったかね？」

「口は……顔じゅう口だらけですよ。その口に大きな貝をくわえていました」

駐在所に知らせておくが、いと清水は芳さんにいった。二百メートルばかり先に駐在所の灯がぼつんとついていたのを彼は先刻見ていた。

その晩、清水は布団の中で、大串の巨人伝説は漂着した溺死体を見た古代人の恐怖から発したのかもしれないと思った。死体は死後ある期間がくると体内の臓器にある腐敗物のためにガスが発生して異常に膨れ上る。これを巨人様死体とか死体の巨人化とか医者の間でも云っているが、芳さんが見てたまげたように普通人の二倍にも三倍にも横が大きくなる。素朴な古代人にとっては異常な現象がすべて驚異の対象であり、その恐怖はやがて超自然なものに対する畏怖から呪術的な畏敬に変わってくる。《體極めて長大》な男が丘の上に居て《蠶（貝）を採りて食》っていたというのは、通説のように貝塚の説明と結合したのかもしれないが、あながちそのみとはいえない。

芳さんも「顔じゅう口だらけで、貝をくわえていました」と息をはずませて報告したではないか。死体が巨人化すると頭髮が禿げ、顔がふくれて眼がつぶれたようになる。その代り口をあんぐりと開け、しかも上下の唇が肥大化して捲^まれ上るから口だけが大きく見える。その上、水による窒息死は舌をべろりと前に垂れる。芳さんはいみじくも舌を大きな貝に見たのだ。

溺死の特徴は、鼻孔や口から白い泡沫が出ていることである。この泡は溺死中に気管その他で形成されたもので、体内に発生したガスがこの泡を押し出そうとするから、白い泡が拭いても拭いても出てくるからこの白い泡が古代人にはまるで巨人の食べているシジミ貝にもたとえられ、垂れた白い舌がハマグリにも比喩されたのではあるまいか。古事記などの擬人化、擬物化の素朴な巧妙さを見ると、それよりはあまり遠くないころに出来た「風土記」がその技法を駆使したとしてもふしぎではない。

清水は現実主義者だから、ものごとを即物的に考える。だから、巨人伝説発生を世紀前の巨人時代を空想した信仰的な心理だとか、民俗学という「マレヒト」的な解釈、百合若遊行伝説とい

ったたぐいのロマンティックな説には、どうも傾聴することができないのである。

清水は東京に帰ったら古代史の好きな友人に今夜の経験を語り、この思いっきの新解釈を述べようと思った。枕もとの波の音には遠くからの数人の人声もまじっていた。芳さんが駐在所に知らせたので、だれかが溺死体の引揚げにかかり、それを見にゆく弥次馬の声かもしれない。いつのまにか睡った。

翌朝、眼がさめたのが八時ごろで、布団を上げにきた女中が早速昨夜の溺死体のことをいった。

死体は昨夜のうちに浜に上り、今朝早くから現場で検屍が行われているということだった。

「それがもの凄くふくれ上った死体ですってね。お客さんが波に揺れているのを見つけられたんですって？」

女中は眼をまるくして清水の顔を見つめた。芳さんが騒いで話したらしい。

「ああ。けど、芳さんは鯨の子だろうといったよ。ぼくにもよく分らなかったけれど」

清水はあいまいに笑った。

「ほんとに遠くから暗い中で見たときは鯨の子だと芳さんは思ったそうすわ。浜に引きあげてみると、男だけど三倍ぐらいあるんですって。まるで昔話にある大串の大男のようすって」

さすがに土地柄で常陸風土記の伝説は行き互^{むた}っていた。

「ようだといってるけど、君は見に行かなかったのか？」

「とても見になんか行けませんわ。大入道の死体で真裸ですって。おお、気持の悪い。それに、身体のほうほうを魚に食べられて、見て来た人は嘔^おき気がすると蒼^{あお}い顔をしました。聞いただけでも、ご飯が咽喉^{のど}につかえそうすわ」

「身もとは判ったのかね？」

「さあ、どうでしょう。いま警察の方が調べておられますが。裸だというんですが、水泳でもして溺れたんでしょうかね？」

「なんともいえないが、海の中を長いこと漂流している間に衣類は脱^とれたかもしれない。魚もつくからね」